



第1図 平松城跡位置図



写真1 平松城跡航空写真(北側から撮影)

1. 位置

平松城跡は曾於市役所末吉本庁から南西に約2km、末吉町南之郷橋野の陣之山にあり、北隣は宮崎県都市に接する県境に位置する。所在地は末吉町橋野の陣ノ山。城は大淀川が形成した標高約200mの舌状台地に立地している。台地から突出したところで大きく挟かれているため、城跡は三方を絶壁が取り囲む独立した丘状になっている。

北側は標高差約40m下に水田地帯が広がっており、城跡から平地を見下ろす地形となっている。

昭和43年に末吉町指定の史跡になり、平成17年には市町村合併に伴い曾於市指定の史跡となる。

2. 歴史的概要

住吉山から南東部一帯は、「国合原(くにあいばる)」と呼ばれ、正平14年(1359年)10月5日に島津氏と相良氏の合戦、元亀4年(1573年)正月6日に肝付氏と北郷氏の合戦の記録が残る場所である。

正平14年の合戦では、島津6代氏久の軍勢と、肥後の相良・真幸・北郷・野々美の連合軍との合戦で、島津軍が敗走している。また、元亀元年の合戦では、肝付竹友が北郷領末吉を侵略するが、北郷左衛門尉時久は勝岡・梶山・山之口・高城の兵と共にこれを打ち破る。三国名勝図会では、この合戦の際に永井刑部が平松城を築城したと記してあるが、この永井刑部は北郷氏の臣とも、肝付氏の臣とも述べられており詳細は不明である。

文献上では、国合原合戦後の元亀4年3月8日に「平松ヲ時久御陳メサレ候」とあり、大岩根河内守宗政や河野筑前守、長井伊賀守らによる神事の記載、また天正2年(1574)12月5日には、北郷忠虎らにより陣払いを行った記載が残る。

城内では最も標高の高い北側中央部に主郭を設け、その周辺には空堀や土塁等が見られ、戦国時代末期の遺構がおおむね良好な状態で残存している。中でも主郭の防御態勢をより強化した4連の横堀は、他に類を見ない非常に特異な遺構である。この横堀は慶長4年(1599)の庄内の乱(庄内合戦)の際に、志布志・松山方面から攻めてくるであろう島津軍に備えて、当時の領主であった伊集院氏が構築したと考えられる。

江戸時代中期に描かれた絵図である、都城島津邸所蔵の『庄内之乱諸城図』『末吉古戦場の図』(写真2, 3, 4)には、4連の横堀がしっかりと描かれた平松城(平松陣と記載)が見られる。慶長年間までには現在残されている姿であったことがうかがえ、なおかつ当時でも4連の横堀が非常に印象深かったと考えられる。

3. 庄内の乱(庄内合戦)と都城十二外城(図2)

庄内の乱は慶長4年から5年(1599~1600)、都城とその周辺地域で起こった、島津氏とその重臣である伊集院氏との争乱である。

乱の発端は慶長4年3月9日、伏見島津邸において、島津忠恒が伊集院幸侃を斬殺したことに始まる。島津忠恒は島津氏宗家当主・島津義久(龍伯)の弟である島津義弘(惟新)の三男で、後の島津宗家の後継者となる人物であった。伊集院忠棟は島津義久の筆頭家老で、島津氏による九州制覇のために活躍した功臣であった。豊臣秀吉の九州征伐の後、秀吉のもとで人質となるが、島津氏存続のために豊臣政権に貢献し島津家の代表的な家臣として認められ、肝属郡一円から都城

まで拝領された人物である。

その忠棟を斬殺したことは、豊臣政権への叛逆とも取れる行為であり、その後忠棟の嫡子である伊集院忠真が島津宗家に対し反旗を翻すことになる。

伊集院方は都之城を本城とし、庄内界限には伊集院氏の一族や家臣を配置した12カ所の外城に陣を敷き、非常に強固な防御態勢を整えた。

一方島津氏は乱を鎮圧するために東霧島金剛仏作寺（現都城市高崎町、東霧島神社）を本営として、島津氏一門と近郷の緒将が庄内に攻め入り、まずは山田城、次いで恒吉城を落とすが、その後はなかなか成果が上がらず膠着状態が続く。この頃に徳川家康が二度にわたり家臣を遣わし、乱の調停を行う。忠真はこの調停を受け入れ、慶長5年3月15日に降伏し、乱は終結する。忠真は乱の後、薩摩頼娃1万石に移され、後に帖佐2万石へと移される。都之城には旧領主であった北郷氏が復帰した。

庄内の乱時、平松城も伊集院氏方の陣城として城内が改修され、この頃に4連の横堀が新設されたと考えられる。平松城は都城十二外城には数えられず、城郭というよりも平松陣という名称が文献に残されている。

都城十二外城一覧表（落城・降伏順に記載）

城名	庄内の乱時の城将	落城・降伏した日	所在地
山田城	長崎治部少輔 長崎休兵衛尉 中村与左衛門	慶長4年 6月23日（落城）	都城市 山田町
恒吉城	伊集院宗右衛門 滝岡平三郎	慶長4年 6月25日（落城）	曾於市 大隈町
志和池城	伊集院掃部助春成	慶長5年 2月6日（落城）	都城市 上水流町
山之口城	倉野七兵衛	慶長5年 2月29日（降伏）	都城市 山之口町
梶山城	野辺市彦	慶長5年 2月29日（降伏）	北諸県群 三股町
勝岡城	伊集院辰如	慶長5年 2月29日（降伏）	北諸県郡 三股町
高城	比志嶋彦太郎	慶長5年 3月1日（降伏）	北諸県郡 三股町
野々美谷城	古垣四郎右衛門忠興 有屋田大左衛門	慶長5年 3月2日（降伏）	都城市 野々三谷町
安永城	伊集院如松 伊集院五兵衛	慶長5年 3月2日（降伏）	都城市 庄内町
末吉城	伊集院小伝次 伊集院兵部小輔忠能	慶長5年 3月9日（降伏）	曾於市 末吉町
梅北城	日置善左衛門尉 渋谷仲左衛門	慶長5年 3月10日（降伏）	都城市 梅北町
財部城	伊集院甚吉 猿渡肥前守	慶長5年 3月15日（降伏）	曾於市 財部町
都之城	伊集院忠真	慶長5年 3月15日（降伏）	都城市 都島町

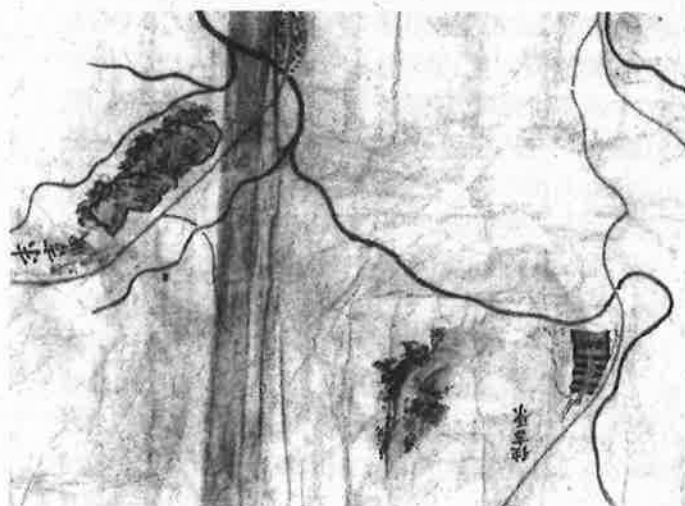


写真2 庄内之乱緒城図（末吉城・平松城部分を撮影）
都城島津邸所蔵



写真3 末吉古戦場之図（末吉城・平松城部分を撮影）
都城島津邸所蔵

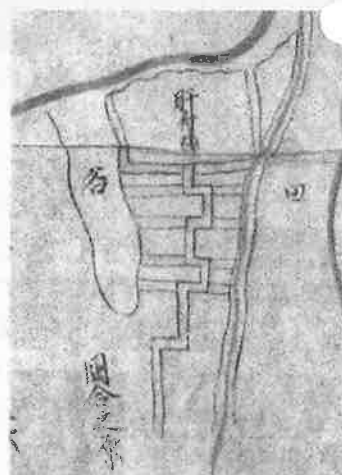


写真4 平松城の比較（古図には肝付陣と記載）

4. 平松城跡の調査について

平松城は庄内の乱では合戦の舞台にならず、乱終結後はそのまま放置され、第2次世界大戦終結時点までには植林地や農地として利用されている。

過去の調査では平成5年に一般地方道飯野松山都城線の改良工事に伴い、県立埋蔵文化財センターによる発掘調査が行われた。調査範囲は城郭の中心部から外れた地点であったが、城に係る新たな遺構の発見が相次ぎ、また出土遺物より縄文時代早期・晩期、弥生時代前期・中期、古墳時代から中世の遺物が出土する複合遺跡であることが判明した。

曾於市では平成25年度から30年度にわたり城内の地形測量を行い、令和元年度には国の補助を受け発掘調査を行った。

・令和元年度の発掘調査について

長期にわたる地形測量調査により、現存する遺構の詳細な性格が表れた地点がある一方、城郭が使用されなくなり、風雨や人為的な崩落や破壊により不明瞭な地点も散見された。そこで城内に8地点試掘トレンチを設定し発掘調査を行った。(トレンチ配置図参照)

【主郭部の調査】

主郭部の中央と虎口に2カ所トレンチを設定。いずれのトレンチからも建造物に直結する遺構の検出はなかったが、トレンチ内土層断面からは整地を行ったように、フラットな様子がみられた。柱穴や礎石を設けない土台式建造物の可能性が考えられる。また第2トレンチからは拳大の礫をまとめた配石遺構(SS-1, 2)が2基検出した。SS-1は表土直下から検出し58点の礫で構成され、SS-2はアカホヤ層上面から検出し7点の礫で構成され、それぞれ時期や性格が異なる。共伴遺物の出土がなかったため詳細は現時点では不明である。

【城内の調査】

明確な成果があらわれたのは第3、第7、第4トレンチであった。第3、第7トレンチからは埋められた一連の空堀が検出した。いずれも深さ約60cmの葉研堀で曲輪を分断する空堀と考えられ、南九州型城郭のプランを踏襲しているようである。都城一帯を領した伊集院氏による可能性が非常に高いが、改修を行った明確な時期は想像の域を出ない。

第4トレンチは複雑な様相を示した。当初、深さ2mを測る空堀状の掘り込みが検出したが、南北方向に延びず、また周囲のトレンチからは城郭跡と関連がない遺構が多数検出した。遺物は全く出土しておらず、第4トレンチの性格については、現在近隣の調査事例

を参考にしつつ、有識者からの指導や助言をいただいている状態である。

【城内の出土遺物について】

前記した通り、平松城跡は縄文時代早期から中世にわたる複合遺跡であるが、令和元年度の調査で出土した遺物は21点であった。出土遺物が最も多く見られた地点は第7トレンチであり、古代から中世の土師器類が中心であった。中でも焼塩壺の小片が1点出土したことは、当時の社会情勢や流通、平松城内の新たな側面をうかがう上で非常に重要な発見であると考えられる。

5. さいごに

戦国時代末期、都城一帯が伊集院氏領となるが、慶長4年3月9日伊集院幸侃の斬殺により庄内の乱が勃発する。乱にそなえて平松城も急ピッチで増改築されたと考えられる。現在残されている平松城に関する文献は非常に少なく、過去の発掘調査と今回の発掘調査成果から考察を進め、都城十二外城との比較検討が今後の大きな研究課題である。

平松城は曾於市指定の文化財となっているが、城内のほとんどが私有地である。近年多発している豪雨災害や人為的な破壊もあるが、市教委としては関係各所と連携を取り、どうにか現状を保存している。また城跡を有する橋野地区では有志が集い、橋野連合会を発足し、定期的に城内の除草作業や整備を行い、さらには周辺の文化財も大切に保存・管理を行っている。

平松城の持つ特異な4連の空堀は他に類を見ない遺構であり、南九州の城郭としても非常に貴重なものであるため、広く紹介すると同時に変わらぬ姿を未来に残していきたい。

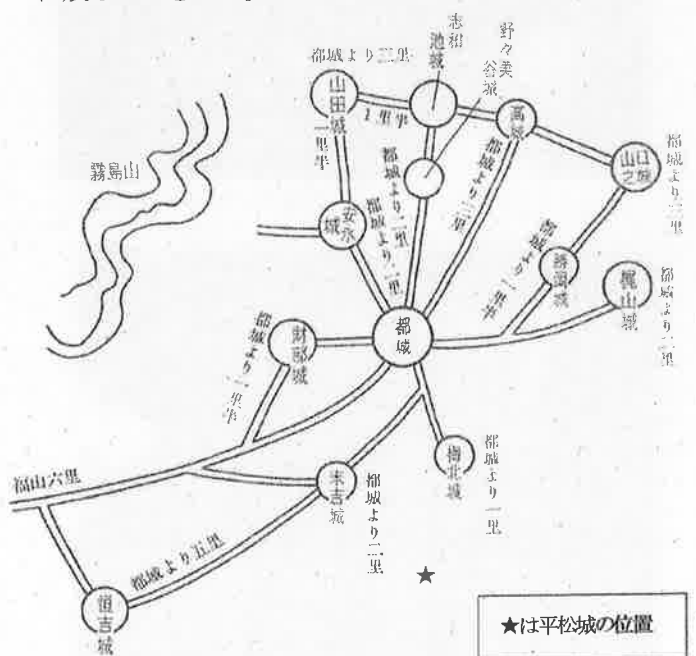


図2 都城及十二砦一覽略図(庄内軍記絵図より)



第2トレンチ SS-1



第2トレンチ SS-2



第3トレンチ 空堀検出①



第3トレンチ 空堀検出②



第7トレンチ 遺物出土



第7トレンチ 空堀検出



第4トレンチ 遺構検出



現地説明会の様子(令和元年12月1日)

平松城跡 トレンチ配置図

S=1:1500

